

平成 25 年度
愛媛県議会海外派遣（南米）
結果報告書

平成 25 年 11 月 7 日（木）～16 日（土）

ブラジル連邦共和国
パラグアイ共和国

平成 25 年度 愛媛県議会海外（ブラジル・パラグアイ）派遣報告書
平成 25 年 11 月 7 日～平成 25 年 11 月 16 日

作成日 平成 26 年 1 月 31 日

- p 1 明比昭治 はじめに
- p 1 派遣目的
- p 2 派遣期間
- p 3 議員団の構成
- p 4 大西 誠 サンパウロ州議会表敬訪問、日本総領事館表敬訪問
- p 5 古川拓哉 ブラジル日本移民開拓者先没慰霊碑参拝、ブラジル日本移民史料館視察
- p 6 兵頭 竜 サクラ醤油、藤原農場視察
- p 7 福田 剛 在伯愛媛県人会創立 60 周年記念式典・祝賀会
在伯愛媛県人会館交流センター視察
県海外技術研修員・県費留学生OBとの意見交換会
- p 8 三宅浩正 イグアス国立公園視察
- p 9 越智 忍 在芭愛媛県人会との交流会
- p 11 兵頭 竜 リオデジャネイロ視察
- p 12 古川拓哉 リオデジャネイロ在住愛媛県人との交流
- p 13 明比昭治 おわりに

はじめに

愛媛県議会海外派遣（南米）議員団長 明比 昭治

11月7日に松山空港を11時50分に出発、成田空港を17時45分に出発予定のユナイテッド航空機に乗り換え、アメリカのニューアーク空港経由で8日の10時40分にブラジル・サンパウロ空港へ、成田で電子機器の不具合を調整中で、出発が15分遅れるとの案内から3時間後にやっと出発し、どうなることかと心配したが結局ビデオや音楽の機器が使えない状況でアメリカまで。出鼻をくじかれた格好となったが、なんとか予定どおり、8日の朝10時40分にトータル約35時間をかけてブラジルに到着した。

南米への旅路は、かように遠く険しい道程であったが、在伯愛媛県人会が創立60周年を迎える記念すべき節目の年に、県議会から超党派7名の議員団を編成し訪問できたことを大変うれしく思う。

今回の南米派遣は、愛媛県海外協会主催の在伯愛媛県人会創立60周年記念訪問に参加する形で実施し、記念式典の出席をはじめ、公的機関への表敬訪問、県人関係企業の視察などが予定されており、それぞれ限られた時間ではあったが、我々訪問団にとって大変有意義かつ感慨深いものであった。これらの結果について、今回の派遣に参加した各議員から後述のとおり報告いたしたい。



訪問団とその到着を歓迎する県人会の皆様

派遣目的

「在伯愛媛県人会創立60周年記念式典」への出席等を通じて南米諸国との友好関係を促進する。

派遣期間

平成25年11月7日（木）～11月16日（土）までの10日間

【日 程】

	月日	時間	行 事
1	11/7 (木)	11:50 13:10 17:45 16:30 21:45	松山空港発 (NH590 便) 羽田空港着 バスにて成田空港へ移動 成田空港発 (UA078 便) [日付変更線通過] ニューアーク空港着 ニューアーク空港発 (UA031 便) [機中泊]
2	11/8 (金)	10:40 午後 夕方	サンパウロ国際空港着 関係機関表敬 (州議会、日本総領事館) 在伯愛媛県人会役員との懇談会 [サンパウロ泊]
3	11/9 (土)	午前 午後	開拓先没者慰霊碑参拝・献花 (イビラプエラ公園) ブラジル日本移民史料館視察 県人運営企業視察 県人経営農場視察 [サンパウロ泊]
4	11/10 (日)	10:00 16:20 18:00	在伯愛媛県人会創立 60 周年記念式典・交流懇談会 在伯愛媛県人会交流センター視察 県海外技術研修員・県費留学生OBとの意見交換会 [サンパウロ泊]
5	11/11 (月)	10:50 12:30	サンパウロ空港発 (JJ3169 便) フォス・ド・イグアス空港着 イグアス国立公園等視察 [フォス・ド・イグアス泊]
6	11/12 (火)	07:00 08:00 16:00 19:40	陸路にてパラグアイ共和国へ移動 在パラグアイ愛媛県人会との懇談・視察 (パラグアイ時間) イタイプーダム視察 (パラグアイ時間) 陸路にてブラジルへ [フォス・ド・イグアス泊]
7	11/13 (水)	午前 12:50 14:54 18:30	イグアス国立公園等視察 フォス・ド・イグアス空港発 (JJ3186 便) リオデジャネイロ空港着 リオデジャネイロ在住県人との懇談 [リオデジャネイロ泊]
8	11/14 (木)	22:55	リオデジャネイロ市内視察 リオデジャネイロ国際空港発 (UA128 便) [機中泊]
9	11/15 (金)	05:20 10:40	ヒューストン空港着 ヒューストン空港発 (UA007 便) [機中泊]
10	11/16 (土)	15:45 19:10 20:50	成田空港着 バスにて羽田空港へ 羽田空港発 (JL1471 便) 松山空港着

議員団の構成

以下のとおり、明比昭治議員を団長に全7名の議員団を編成。

【議員団名簿】

	氏名	期数	会派	備考
1	明比 昭治 AKEHI Shoji	4	自民	団長
2	越智 忍 OCHI Shinobu	6	維新	副団長
3	三宅 浩正 MIYAKE Hiromasa	2	自民	会計
4	福田 剛 Fukuda Tsuyoshi	1	県・民	
5	兵頭 竜 HYODO Ryu	1	維新	
6	古川 拓哉 FRUKAWA Takuya	1	維新	
7	大西 誠 ONISHI Makoto	1	自民	監査

サンパウロ州議会・日本総領事館表敬訪問、在伯県人会役員懇談会

文責 大西 誠

【11月8日（金）】

《サンパウロ州は人口約4,146万人・面積約25万平方kmでブラジル人口の約23%・全土の約3%を占める。ブラジル日系人約160万人の内100万人超がサンパウロ州在住。愛媛県からの移住者及び県人会は1908年第一回移民船「笠戸丸」にて6家族・21名が渡伯したのを皮切りに累計5,000～6,000名》

成田出発から約28時間後の現地時間11月8日午前11時前にUA031便にてサンパウロ国際空港に到着。県人会役員（西村定栄会長夫妻・中矢伝さん・藤原利貞さん等）の温かい出迎えを受け、サンパウロ州警察の先導（バテドール）の中、13時よりサンパウロ州議会を表敬訪問。サムエル モレイラ ダ シルバジュニオール州議会議長、ジョージ羽藤州議会副議長（祖父は今治市出身）に出席いただき、州庁舎及び州議会議事堂を見学後、会議室にて多くの地元テレビ局取材の中、意見交換会を実施した。日本人移民の歴史や現在のブラジルにおける日本人の社会進出・日本人コミュニティーの話など実りある意見交換会であった。



サンパウロ州議会議長表敬訪問にて

また、意見交換の中で、中村知事より記念品（真珠ネクタイピン）を贈呈するとともに、愛媛県の各種パンフレットを提示しながら工業・農業・観光のPRも実施した。これに対し、サンパウロ州議会より記念の盾が中村知事・竹田議長に贈呈された。

16時より日本総領事館を表敬訪問。福寫教輝（ふくしま のりてる）在サンパウロ日本国総領事館総領事・坪井俊宣（つばい としのぶ）在サンパウロ日本国総領事館領事（西条市出身）に出席頂き、意見交換会を実施した。サンパウロ市中心街のビルの3フロアーを占める総領事館に入館の際は、ドアの頑丈さとセキュリティーの厳重さに驚かされた。



日本総領事館にて

なお、意見交換では福寫総領事より四国お遍路さんの話や道後温泉の話も飛び出し大変話題満載の意見交換会となった。

また、中村知事より記念品（真珠ネクタイピン）を贈呈し、ここでも愛媛県の各種パンフレットを提示しながら工業・農業・観光のPRを実施した。

その後ホテルにて公的訪問団23名・民間訪問団12名計35名が集い結団式を開催した後、19時30分より市内レストラン（CHURRASCARIA）にて名物シュラスコ料理を食べながら西村定栄県人会会長（旧

三間町出身第14代会長)はじめ在伯愛媛県人会役員11名の出席の下、故郷愛媛の話題を中心に和やかな雰囲気の中で大いに語り合う懇親会(県人会主催)が開催される。約2時間の懇親会は愛媛・日本の懐かしい話やブラジルでの歴史・苦労話に花が咲き、予定時間を超過して盛大に執り行われた。

22時過ぎに宿泊ホテル(ブルーツリー プレミアム パウリスタ)に到着し、サンパウロの慌ただしい初日を終えた。

ブラジル日本移民開拓先没者慰霊碑参拝、ブラジル日本移民史料館視察

文責 古川 拓哉

【11月9日(土)】

午前8時、我々はブラジル日本移民開拓先没者慰霊碑を参拝、厳粛な空気の中で献花させていただきました。

慰霊碑は1975年にブラジル日本都道府県人会連合会が、イビラプエラ公園内に建立したもので、天皇皇后両陛下や皇族方、政府高官をはじめ多数の人々が開拓先没者の霊を参拝している。

今日のブラジル日系人社会の繁栄は、初期開拓移民の犠牲の上にあることは言うまでもなく、祀られている無縁仏こそがブラジルでの苦闘の証しであり、今でも荒廃した入植地の共同墓地に名もなき日本人が眠っているとのことだった。

また、日系社会の礎となった先人の霊を祀り、慰める事こそが我々の務めであるとの言葉を聞き、当時の方々のご苦労が偲ばれるものとなった。さらには、6月18日の「移民の日」にはブラジル日系社会の欠く事の出来ない行事として慰霊碑参拝が厳粛に執り行われているとのことだった。

参拝を終え、我々はブラジル日本移民史料館に向かった。ブラジル日本移民史料館は、1978年6月18日にブラジル日本移民70周年祭の記念事業として開館した施設で「日本民族にとってブラジルとはなんであったか、また、ブラジルにとって日本民族はなんであったか」をテーマに、「日本文化」を背負った日本民族が新世界の形成に参加した証



開拓先没者慰霊碑にて献花

として、また、後世にその歴史を伝えながら、ブラジル社会に広く普及することを目的として、設立運営されている。

構成は3つの柱から成り立ち、A. 新世界へ渡った日本人。B. 産業開発への貢献。C. 新たな進路を求めて。という大きなテーマの下、さらにそこから各個に細かく説明がなされていた。日本人の海外移住は1868年(明治元年)のハワイ移民を皮切りとしてはじまり、ブラジルへの移民は1908年に始まった。第1回のブラジル移民781名を乗せた笠戸丸が着いた1908年6月18日は、前述のとおり「日系移民の日」と



ブラジル移民船「笠戸丸」

して定められ、今なお記念式典が催されている。ここではコロニア（ブラジル日系社会）の発祥から近代の日伯関係の新たな展開まで、1世に代表される先人たちの多くのご労苦と、2世、3世の増加に伴う日系社会の希薄化の問題などを余すところなく貴重な資料と共に学ぶことができる。

史料館で学ぶことで、より当時の背景や先人たちの想像を絶するようなご労苦や現在の日系社会が形成されるに至った足跡についての理解が深まることによって、現地で知り合った関係者との会話の重みを感じることができた。

サクラ醤油、藤原農場視察

文責 兵 頭 竜

【11月9日（土）】

サクラ醤油は1930年に移住した中矢夫妻（松山市出身）によって始められ、1940年にサンパウロにてサクラ中矢商店が創業された。サクラ醤油は丸大豆とトウモロコシを原料として作られ、トウモロコシの香りと粘りが特徴となっていて、味は甘みがあり少し日本で味わう醤油とは異なる印象を受けたが、遠く離れたブラジルで日本を感じさせるには十分であり、サクラ醤油がブラジルに暮らす日本人や日系人にとって大きな役割を果たしていることは言うまでもない。また、現在、同社は醤油をはじめ日本酒・ワインなど約250品目を取り扱っている。

藤原貞利氏（松山市出身）が経営する藤原農場は、アチバイヤ市で1980年から続く花卉栽培農場である。藤原農場では、当初ハウスでセントポーリアを栽培したところ突風でハウスが倒壊し大打撃を受けるという苦い経験をされたこともあるそうで、その時に、ハウスが要らない花に着目し、ミニバラやアジサイの栽培を始めるなど、経営安定化に取り組まれたというエピソードを披露いただいた。なお、現在ではハウス栽培も順調で10年前からはシンビジウム、今は胡蝶蘭が栽培面積の27%を占めている状態であり、現在主力の胡蝶蘭は贈答用でそのほとんどがサンパウロで消費され、一鉢1,000円程度の卸値で出荷されている。なお、花卉栽培に欠かせない水は地下水で賄っており、地下5mの地点と地下120mの地点に水脈があり、水源としているということであった。

また、ハウスで使用する暖房の燃料は石油燃料から木質バイオマス燃料であるユーカリの木切り株にシフトされ、環境への配慮がなされていた。



サクラ醤油工場にて



アチバイヤ市の藤原農場にて

目下の悩みは、近隣に工場建設が進んできており、それによって、賃金の増加や労働者の確保が困難になりつつある現状と現在雇用している100人の労働者の人間関係だという事であった。

この日視察した企業・農場は、いずれも現在は成功をし、広大なブラジルの大地で事業展開されているが、ここまでの道程は、想像を絶する困難があったものと推察をする。そのご労苦に対して心から敬意を表するとともに今後の同社・同農場の発展を祈りたい。

在伯愛媛県人会創立60周年記念式典・祝賀会 在伯愛媛県人会館交流センター視察 県海外技術研修員・県費留学生OBとの意見交換会

文責 福田 剛

【11月10日（日）】

サンパウロ市内にあるブラジル北海道協会会館にて開催された「在伯愛媛県人会創立60周年記念式典」には、中村時広知事を団長とする公的訪問23名と、井上善一愛媛県海外協会会長をはじめとする民間訪問12名の合計35名が愛媛県訪問団として参加し、西村定栄会長を代表とする在伯愛媛県人会約350名の大歓迎を受けることとなった。西村会長からは、ブラジル移民105周年節目の年に、在伯愛媛県人会創立60



式典の様子

周年記念式典が開催できて、喜びに堪えない、遠き道のりを超えてご来伯いただき感謝の気持ちでいっぱいであると歓迎の言葉をいただいた。また、西村会長は、現地の気候・食べ物の素晴らしさや、地震・津波がなく過ごしやすい地であることなど、ブラジルの良さを紹介されていたが、実際、私たちが滞在した約6日間は、突き抜ける青空が広大なブラジルの赤土を明るく照らし、南米の湿気のない乾いた空気がとても心地よいものであった。

なお、式典では、実父がブラジル移民として数年間過ごしたこともある中村知事の祝辞で、2014年ブラジルサッカーワールドカップで、愛媛県出身の日本代表長友選手の出場・活躍が期待されることや、瀬戸内海を渡るしまなみ海道のサイクリングのことなど、愛媛にまつわる話題が披露されるとともに愛媛に来ていただければ歓待したい旨の言葉もあり、在伯県人の方々は愛媛への思いを強くされたに違いない。

また、井上海外協会会長からは、同協会設立30周年でもあり、この式典に参列してもらっているブラジルからの研修生も52名となっているとの報告もあった。

さらに、福嶋教輝在サンパウロ日本国総領事の日本語とブラジルポルトガル語とスペイン語による歓迎のスピーチでは、愛媛県人会が愛媛県から毎年4名の研修生を受け入れていること、また愛媛県が、海外技術研修員・県費留学生受入事業を継続していることに対し、感謝の言葉をいただいた。

そして、在伯県人会副会長からは、愛媛県出身の移民は累計約5,000人だが、現在では3万人以上にも上るとの説明があり、県人社会がブラジルの地で着実に発展していることを喜ばしく感じたところである。

その他にも、ジョージ羽藤サンパウロ州議会副議長、安部順二連邦下院議員など日系議員も多く駆けつけており、祝辞を述べておられたが、ブラジル人学校で



熱気あふれる式典・懇親会場

は1日4時間の授業時間だが、日系社会は高等教育をしっかりと定着させてい

る違いを強調していたのが印象的であった。

式典では、愛媛県からの訪問の記念品として、紙の街 四国中央市の工芸品である水引細工で再現した移民船を贈呈した。

式典後の、祝賀会では、愛媛の松山野球拳なども行われ、ラテンバンドとサンバカーニバルダンサーも登場し会場一体となって大いに盛り上がった。訪問団は、在伯愛媛県人会の方々からの心からのおもてなしの気持ちに喜びを感じるとともに、県人会の皆様との心からの親交を深めることができた。

さらにこの日、在伯愛媛県人会訪問の前に、10年前の50周年記念訪問の際に、会館近くの公園で当時の加戸愛媛県知事が植樹した木の確認を行った。前加戸知事が植樹してから10年がたった今では2倍ほどの大きさに育ったとのことであり、愛媛とブラジルの友好の印としてさらに大きく成長してほしいと願ったところである。

その後、在伯愛媛県人会館を訪問し、在伯愛媛県人会の西村会長との意見交換を行い、在伯県人を取り巻く環境や現地での活躍などについて、説明を受けることができた。また、海外青年協力隊を支援する会から預かった五月人形の贈呈も行った。



明比団長から西村会長へ五月人形の贈呈

さらに、夜には海外技術研修員・県費留学生OBとの意見交換を行った。愛媛大学などの留学技術研修生として愛媛で技能を磨かれた若者は、帰国後、医療系、建築系の技術者として、ブラジル各地で活躍中とのことであり、留学研修生たちからは、未永く研修制度が続くようにとの声が寄せられた。日本語とポルトガル語をミックスしての意見交換ではあったが、留学研修生たちの言葉からは、一様に日本とブラジルの懸け橋として人の役に立つ仕事がしたいとの思いが強く感じられ、海外技術研修員・県費留学生受入事業による移住先国と本県との交流促進効果を肌で感じることができた。



意見交換の様子

イグアス国立公園視察

文責 三宅浩正

【11月11日(月)】

我々は朝8時にホテルを出発、サンパウロ空港からJJ3169便にてフォス・ド・イグアス空港に向かった。到着するとバスに乗り込み、陸路にてアルゼンチンに入国、イグアス国立公園を目指した。



国立公園内に敷設されている軽鉄道

イグアス国立公園はブラジルとアルゼンチンの両国にまたがる広大な自然公園で、パラグアイとも国境を接している。アルゼンチン側は1934年に国立公園として指定された。風景の美しさと多様な動植物層を持った亜熱帯林として1984年にユネスコから世界遺産の登録を受けている。

一方、ブラジル側は1939年に国立公園として指定された後、1986年に世界遺産の登録を受けている。「イグアス」とは、原住民の言葉であるグアラニ語で「大なる水」のことである。広さはアルゼンチン側が約68,000ヘ

クタール、ブラジル側は約185,000ヘクタールもある。そのうちで、一般観光客に開放されているイグアスの滝の周辺は公園全体の約0.3%を占めるに過ぎない。

午後2時過ぎ、入園受付を経て園内をバスで移動、軽便鉄道に乗り換える。そこから滝の近くにある終点で下車の後、遊歩道で河の上を「悪魔の喉笛」に向けて歩き始めると、大小の滝が視界に飛び込む。滝の部分は全長2.7km程で半円形の形状をしており、そこに季節によって増減する150から300もの大小さまざまな滝が流れ落ちている。イグアスの滝は雨季と乾季では流れ落ちる水量に相当の差があり、見た感じもかなり異なってくるという。今回は、もっとも水量がある雨季直後の11月の視察であったため、迫力のある景観に加え、場所によっては遊歩道にかかる水しぶきのために雨具が必要なほどであった。

歩き始めて約30分程で、「悪魔の喉笛」のすぐ傍まで近付いた。まさにイグアスの滝のハイライトともいべきスポットである。「悪魔の喉笛」とは滝を流れ落ちる水音のすさまじさから付けられた名前だという。滝から響き渡る轟音とともに流れ落ちる、形容し難いほどの巨大な水塊が地の底に吸い込まれるような景観に圧倒された。そして天候にも恵まれ多くの虹を見ることができた。伝説によれば、イグアスの滝にかかる虹には命を蘇らせる力があり、見た者を幸せにするという。

限られた時間ではあったが、圧倒される大自然と地球の神秘に触れ、自然・文化・歴史の大切さを再認識する素晴らしい視察の機会が得られたことを心より感謝したい。



見るものを圧倒する迫力の景観

在芭愛媛県人会との交流会

文責 越 智 忍

【11月12日（火）】

本日は、パラグアイへの訪問となる。

パラグアイ在住の方たちへの訪問は、久しぶりとのことで、我々訪問団の受け入れに際し、多くのプログラムを用意していただいているようで、宿舎の出発を当初の予定よりも



イグアス日本語学校の校庭にて

30分繰り上げ、午前7時に出発し、一路パラグアイ国境を目指し陸路を急ぐ。

朝7時30分には国境に到着するが、すでに多くの人々が行きかい通勤ラッシュの様相を呈している。

陸続きで国境の接することのない日本人にとってはなじみのない光景である。

しばらく進むとパラグアイ警察と移住地代表の方たちの迎えを受け、パトカーの先導によりさらに30km進む。

イグアス農協製粉工場のサイロに到

着し説明を受ける。小麦を主に扱い90パーセントがスリーゼロクラスのパン加工用、残りがフォーゼロクラスの麺類用に加工されている。

10時イグアス日本人会に到着。福井一郎会長(3歳でパラグアイに来た1世)より概略説明を受ける。この場所はジャイカ直轄移住地とのことで、1世は直の日本とのパイプを持っているが、現在主に活動しているパラグアイで生まれた2世にとっては日本との交流がだんだん薄れてきているのが、悩みである。また、1世であっても、これまで実際に故郷と交流する機会はさほど多くはなく、自分たちが取り残されたという思いもあるようで、我々の訪問を心から喜んでくださったことが印象深い。

パラグアイには世界中から多様な人種が移住してきているが、一番信用されているのが日本人である、最近日本人バックパッカーが来るが、汚い、臭い恰好で来られると、日本人として誇りを持っている子供たちにとって、あれが日本人かという幻滅を与えてしまうので、悩ましい問題だ。

子供たちは日本語、スペイン語、ポルトガル語、現地先住民言語のワラニー語の4つの言語を自由に使うことができる。

最近の悩みは子供たちを大学に行かせることであったが、以前のように330km離れた首都のアスンシオンまで行かなくても、約30kmのところまで大学ができ、就学しやすい環境ができ、大卒の後継者が誕生してきている。

たった10年で小麦やトウモロコシ・ごまなどたくさんの作物について、輸出量で世界のトップテンに入るものが増えてきた。

農協を出たのちに第三愛媛の森にて記念植樹を行う。ラパチヨをはじめ様々な種類の木を植える。約三年で成長とのこと。原生林を伐採した反省より、環境保全が見直されていることに応えるものだ。

パラグアイ愛媛県人会の主催による懇談会では、手作りによる煮物・きんぴら・赤飯・いなりずしなど、数多くの品々がふるまわれた。豆腐に使う大豆なども、遺伝子組み換えを避けてすべて手作りであり、ヨモギ餅なども日本よりも本物らしいヨモギ餅であった。

また、アトラクションとして子供たちの踊りや、青年による太鼓(パラグアイの日系人製作)の披露も行われた。感心するのは、ブラジルとは異なり、ほんとに小さな子供までが完璧な日本語を話すことである。ブラジルでは日本語教育が禁止された時代があったが、パラグアイでは滞ることなく日本語は必修であったためである。



在巴県人会の皆様と

その後、パラグアイ移住地の日本語学校と診療所を視察し、イタイプー発電所へと向かう。中国の三峡ダムに瞬間発電量では抜かれたが、年間発電量では世界一であり、ブラジルとパラグアイが半分ずつの権利をもつ20基のタービンがあり10基はブラジルの会社、残りはパラグアイの会社が権利を持つが、パラグアイは2基のみを使用しあとはブラジルに貸している。コストは1kwあたり8ドル。ちなみにイグアスの滝の水量をもってしてもタービン2基しか回すことができない。

その後再び国境を越えブラジル側に戻り、フォス・ド・イグアス市内のレストランにて夕食の後、23時にホテル到着となった。



年間発電量世界一のイタイプー発電所にて

リオデジャネイロ視察

報告者 兵頭 竜

【11月13日（水）】



W杯を間近に控えたマラカナンスタジアムにて

い水準であったことは、訪問団皆が思った事だろうと想像する。しかしながら、W杯の決勝戦が行われるピッチを目の当たりにすると、大きな興奮を覚え、開催国ブラジルが1950年のマラカナンの悲劇を払しょくできるか見ものである。また、W杯、オリンピックと世界的イベントを抱えるリオデジャネイロの受け入れ態勢を聞くと、会場が分散されるW杯は対応ができるが、会場が比較的集中するオリンピックではホテルの数が絶対的に不足しており、その対応が急務であると感じる。対策として、ホテル建設を進めることも考えられるが、リオデジャネイロ市では大型客船で宿泊客の対応をする方向で協議を進めており、えひめ国体を開催する我が県にとって、その発想は1つの参考材料であると感じたところである。

課題は治安と渋滞する道路事情であるが、インフラ整備は急ピッチで行われており、不安定な治安は厳重な警備体制の強化とブラジルの国民性に期待したい。

リオデジャネイロ在住愛媛県人との交流

文責 古川 拓哉

【11月13日（水）】

リオデジャネイロ在住愛媛県人との交流では少ないながらも現地で活躍している関係者との交流の機会を設けていただいた。現地の関係者によると、今回、愛媛県からの訪問団来訪に際し、在住県人に連絡を取ったところ、1世の方々は高齢となり、亡くなった方、入退院を繰り返し外出するのが困難となった方、連絡がつかなくなった方、2世以降の方については日本語が不自由なため参加を見送った方など、様々な理由で参加できない方が多かったそうである。そのような中、4名の方々に参加いただいた。

そのうちのお一人、リオ州立大学で日本語を教えながら日系企業で総務の仕事をしている方の話では、在住するきっかけは13年前の観光でリオの自然、人、時間の流れ、すべてに衝撃を受け、その後にパラグアイで語学を教える中で、日本語及び日本の文化を伝えたいという思いが強くなり、自身の使命と考え移住することを決意されたそうである。この方は、リオに来る前に日本で日本語教師の資格を取り、1年間パラグアイで、生徒の90%がパラグアイの子供という中で教鞭を取られていた。現地では、日本語のみならず、日本のしつけなど含めた日本の教育方法が素晴らしいとされ非常に評価されているようで、パラグアイの親は、日本の教育を子供に受けさせたいとの願望が強く、日本語の授業がある学校に行かせることが多いとのことであった。そのことから日系社会の教育機関が現地に比べ教育水準が高く、人材育成に多大の貢献を果たしていることが伺えた。

今回の訪問では総じて、日系社会の果たしている役割の高さを感じる事が多く、同胞として、現地で苦勞されながらも活躍する関係者がいることに誇りを持った。

しかしながら、移住者の高齢化と2世・3世への世代交代が進み、子弟の愛媛に関する知識や郷土意識の希薄化が懸念されている。

愛媛県による南米愛媛県人会の移住者子弟を支えていく取り組みは、県内の大学に受け入れる県費留学生受入事業と、県内企業や県の試験研究機関等で専門技術を習得する海外技術研修員受入事業であり、本県との交流の絆となる人材育成に長年取り組んでいる。その成果として現地で活躍しているOBからの報告には非常に頼もしいものを感じた。

また、県人会に対しても、活動費の助成や、今回のように官民合同の訪問団による周年行事への参加と周年の端境期に、県職員が各国の県人会を順次訪問し、移住地の状況や支援ニーズの把握など、県人会とのつながりの構築を進めると共に、移住者のふるさとに対する想いに応えるため、県海外協会や県国際交流協会と連携して、ルーツ探しへの情報提供や里帰りの際の支援なども行っている。

今回の訪問で感じた同郷の絆を、次の世代へとしっかりつないでいくためにも、今後も、南米社会における本県の良き理解者であり、移住先国との友好親善の架け橋となっていていただいている在外県人会や移住者の方々との絆の交流を大切にしていかなければならない。



リオデジャネイロ在住県人との交流会にて

おわりに

愛媛県議会海外派遣（南米）議員団長 明比 昭治

南米での関係者との交流を通して、最も印象に残ったことは、県人の皆様が故郷愛媛からの訪問を心の底から喜んでおられたことである。故郷から遠く離れた異国の地での生活は、郷愁の念を強く呼び起こすのであろう。さらには、日本人社会に対して現地の住民から非常に高い信頼と評価が寄せられており、県人の皆様のご活躍あつてのことと、愛媛県人として大変誇らしく感じたところである。これは、県人の皆様が、日本人としての誇りを胸にその魂の伝承を大切にされていたことによるものであろう。この精神は、日本に暮らす我々も大いに見習わねばならないものであった。

南米での日々は非常に足早に過ぎ去っていったが、これも公務が充実したが故のことであり、南米への派遣に際してご尽力いただいた関係諸氏のおかげであることをお礼申し上げるとともに、我々を温かく出迎えてくださった県人をはじめとする現地の皆様の今後ますますのご活躍を心からお祈りし、結びの言葉とさせていただきます。



竹田祥一議長と議員団

(古川議員) (大西議員) (明比団長) (三宅議員) (越智議員)
(竹田議長) (福田議員) (兵頭議員)